



[評者]

尾久 守侑

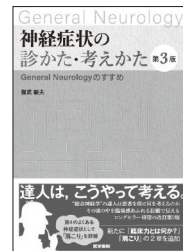
国立病院機構下総精神医療
センター

神経症状の診かた・ 考えかた 第3版

General Neurology のすすめ

福武 敏夫 著

●B5 頁440 2023年4月
定価: 5,940 円 (本体 5,400 円+税 10%)
[ISBN978-4-260-05103-3] 医学書院刊



本書の初版が出版されたのは2014年の5月で、病棟に出たばかりの研修医1年目だった私はこれを直ちに買って勉強をした。知らないことばかりだった。第2版が出版された2017年には精神科医2年目で、てんかんセンターに勤めていた。当然買って読んだ。知らないことばかりだった。そして第3版の出版された今年2023年はそんな私も医者10年目になった。今回は買わなかった。買う前に医学書院が本を送ってくれたからである。そして読んだ。知らないことばかりだった。

と、書くとは何度も読んでいのにその都度内容を忘れていのかと驚いてしまうが、実際すべてを記憶できていない部分はまああるにせよ、そういうことを言いたいわけではない。まず第一に、内容が毎回更新されている。改訂に当たって新しい客観的知見が追記されることはしばしばあることだが、すでに熟達した臨床家である著者の臨床感覚も新鮮に更新されており驚愕する。網羅性が増していること以上に、時を経て複数回テキストを再読し書き直したことによって、1冊を読み通したときにわれわれ読者に憑依する著者の臨床感覚に年輪のような重層性が生まれており、これは並大抵の医学書の改訂では起こり得ない現象だと思う。

序章に置かれた「臨床力とは何か?」という文章に「臨床場面と患者に向き合う時、何か気概・情熱をもって臨むのが必要ではないか。例えば、ホスピタルツアーをここで終わりにするとか、医療・医学のレベルアップのために教科書を一行でも書き換えるとか、skillとかtechniqueではなく、そういう気概を『臨床力』と呼びたい」とあって、まさにその姿勢がこの書籍、この改訂にも表現されていると思ったし、この言葉は私

が今指針とすべき意識そのものだと勝手に思った。

最初はあれこれ意識を高くもっていても、そういう気概・情熱はだんだんなくなっていくのが普通である。どんなに研修医の頃デキレジだった彼や彼女も10年も経てば臨床は「生活」になっているし、そもそも臨床の現場にいないということすらしばしばある。そんな「臨床力」を何十年ともち、磨き続けることがどれだけ困難なことか想像に難くはなく、言い方は適切とは言えないかもしれないが、さらっと書かれた本のようでいて、くぐり抜けてきた地獄の数が厚みとして伝わってくるのを感じる。

私は特に「片頭痛」の項目を今回改めて読んで感じたのだが、本書のような単著は、その臨床感覚をDNAレベルに刷り込むことが1つの存在意義としてある。DNAレベルに刷り込むとはすなわち、熟達してきたときに行われる診療行為の1つひとつに、かつて読んだこの本の影響が見て取れることと言ひ換えることができて、私の場合はほとんどの章を読み返してこの「福武本」が私の神経診療に影響していることを再確認した。それは、可塑性の高い研修医や後期レジデントの頃に読んだからということが大きいのだろうとっていて、実は今回第3版を読んで初めて知ったことなどを診療で実践してみたときに自分の可塑性がめちゃくちゃ低くなっていることに気がついた。自然に低くなっていく可塑性にあらがってでも新しい知識や感覚を身につけようと実践するのが「臨床力」なのだと思うので、ここは私の新しい試練ではあるのだが、もっと若い先生方でもし未読の方がいるのであれば、この第3版を必ず購入し臨床医のDNAに組み込むことをお勧めしたい。